

19 垣本鍼源の刺絡

友部和弘・石野尚吾

北里研究所東洋医学総合研究所

者名、疾患名あるいは病状、訪問日、治療法、治癒した月日、採血量が記されている。

垣本鍼源（針医、生没年未詳、京都の人）は、明和（一七六四～一七七二）の頃、韭菜針なる三稜針を用い、難病をよく療したという。その伝については山脇東門『東門随筆』、浅田宗伯『杏林雑話』に記述があり、当時ある程度の評価を得ていたことが窺われる。鍼源の医術は娘の茂登により『熙載録』と題され天明二（一七八二）年に刊行された。本書には一七六五～一七七二年にわたる治験、計七二例が収録されている。今回はこの治験例を調査分析し、考察を加えることにした。

まず一例を示すと「妻、小腹に塊有り：腰痛み趨歩：能わず。正月十有七日：来たる。大人乃ち大針を以て脾俞を刺し：小針を以て腹を刺し、三稜針を以て委中を刺す。八月十有三日：已ゆ。血出ずること三升可り」（原漢文）とある。以上のように全治験例に、患

〔小針、大針、三稜針の使用頻度〕小針二三例（三二%）、大針一七例（二四%）、三稜針七〇例（九七%）。〔三種の針を単独で使用する頻度〕小針一例、大針一例、三稜針三二例（四六%）。〔三種の針を併用するときの優先順位〕大針先、三稜針後が六例。小針先、三稜針後が九例。三稜針先、大針後九例。三稜針先、小針後が一二例。大針先、小針後、三稜針最後が一例。〔対象疾患と治験数〕瘡一九例。瘤二例。牡痔三例。噎塞一例。癬疥一例。淋病一例。癩三例。積二例。痛風一例。下疳瘡一例。癩癩一例。癩風一例。骨疽一例。喘息一例。頭痛や腰痛などの疼痛性疾患二八例。怪我による傷五例。腋下の臭気一例。〔使用頻度の多い刺絡部位〕患部三八例（五四%）、委中一七例（二四%）、尺沢一三例（一九%）、手足の指頭一二例（二七%）。その他の部位としては針医ということもあり、頭部では二六箇所、上肢は八箇所、胸腹部は一箇所、腰背部は四箇所、下肢は二四箇所の経穴名を記している。〔治癒に要

する期間)一ヶ月以内は二三例。二ヶ月以内は二例、三ヶ月以内は四例。四ヶ月以内は八例、五ヶ月以内は四例、六ヶ月以内は五例、七ヶ月以内は三例、八ヶ月以内は一例。〔採血量〕(本書に記される容積の単位については、荒木性次『新古方薬囊』の説に従い、一合は約二cc、一升は約二〇ccと解することにする。)一勺一例。一合四例。二合四例。四合一例。五合四例。六合三例。七合一例。八合二例。九合一例。一升二二例。二升一三例。三升七例。四升四例。五升五例。七升二例。八升一例。九升一例。一斗一例。一斗一升一例。〔患者の男女比〕男四四例(六一%)。女二六例(三六%)。〔患者の年齢層〕一〇代四例。二〇代一一例。三〇代九例。四〇代九例。五〇代四例。六〇代三例。七〇代一例。

以上の分析結果が得られた。本書収録全七二治療中、七〇治療に刺絡が行われていた。このうち刺絡単独治療は三三例(四六%)であった。小針と大針の単独治療は各々一例であった。これより鍼源の治療は刺絡を軸とし、大針と小針は補助的に使用していたものと言

えよう。各種の針を併用するとき、三稜針を先に用いた後、小針、大針を使用する場合は比較的多い。三稜針の刺法の指示として「痛く刺す」「浅く刺す」「微かに刺す」「深く刺す」などと記されている。対象疾患としては瘡や疼痛性の疾患が多い。使用頻度の多い刺絡部位は患部、委中、尺沢、手足の指頭で、その他患部周辺の数箇所を経穴にも行う場合がある。治療に要する期間は、一〜二ヶ月以内のものが約六割、七、八ヶ月に及ぶものもある。採血量は一合(約二cc)から五升(百cc)までのものが多く、吸角の使用もみられないことから、比較的少ないであろう。

昨年の当学会で「刺絡」の語は荻野元凱『刺絡編』一七七一刊、以降一般的になった旨を報告したが、一七七八刊の『熙載録』中には「刺絡」の語が一切みられなかった。